

# 批評の系譜 —19世紀における『タイピー』受容—

平野 温美

## Marquesans in the *Typee* Criticism

HIRANO, Harumi

### Abstract

Melville's first novel *Typee* is an animated narrative of a cross-cultural experience of a young American in the South Pacific. The *Typee* criticism written in English in the 19th and 20th centuries, especially on the issue of primitivism, reminds us of the different statements made by the Pequod crews looking at the same doubloon. The reading of the book itself is a way of encountering the Marquesan people, and the reviewers and critics have interpreted them in various ways, such as "the inhabitants of the garden of Eden" or "depraved cruel savages" in the 19th century and even the "uncreate" in the 20th century. The purpose of this treatise is the discussion of the 19th century interpretations and see their historical and ideological perspectives on the subject.

### はじめに

『白鯨』(*Moby-Dick*)のピークオッド号の乗員が、スペイン金貨を見上げ、金貨の面に刻まれた模様を、各自各様に見て、意味を解いたように、<sup>1</sup> 19世紀にマルケサスを訪れ、そこで自分たちとは異なる文化に生きる人々に遭遇したアメリカ人は、自分に見えるもの、見ようとするものを見た。このことについては、その題名も『マルケサスとの出会い』*Marquesan Encounters*を著したT. W. Herbert, Jrが、マルケサスを訪れた三人の実在人物を挙げて、かれらが理解できない「生きているなぞ絵」であるマルケサスを、どのように理解しようとしたかを示してくれた。<sup>2</sup> この出会いで、観察者であるアメリカ人の中にある文明観が、どのような特質をもっているかが、逆に照射された。すなわちマルケサスとは何かを問うことは、「アメリカ文明とは何か」を問うことと同義となることを意味する。さらに、「他者を理解することは、結局はどれだけ自分を知るかと同じ」でもあるからして、マルケサスという相手を鏡として、彼らは自分の姿を映し出してみせたのである。<sup>3</sup>

それでは、ハーバードの言うアメリカ人のマルケサスとの出会いの関係を、*Typee*という作品を読む文学批評の行為に当てはめてはどうだろうか。すなわち、『タイピー』はいったい批評家たちにどのように読み解かれてきたのだろうか。特に、いわゆるプリミティヴィズムについて、19世紀と20世紀の批評家たちは、メルヴィル描くタイピーに重ねて、どのように解釈し、概念化

したのか。あったとすればどのような変化があったのか。さらに併せて、批評には発展があるのだろうかも視野に入れて、それらを考えたい。以上を考察するのが、この小論の試みである。

文学作品は、読まれることによって初めて成立する。読者による受容のすがた、あるいは批評のイデオロギーが、作品の解釈を決定するからだ。同じ作品が、人によって時代によって、悪しき本にもなり、良き本にもなる。それは、文学批評が作品を鏡にして、意識的にも無意識的にも、その時々、人あるいは時代を映し出すからである。どのように内容は受容されたか、その受容がいかなる影響を与え、また受け継がれてゆくのかを確かめておきたいのは、くり返すが、文学作品はその受容の中にこそ意味があるといってもよいからである。今回は主として19世紀の批評が対象である。

## 1

『タイピー』はメルヴィルの作品のなかで生前、最も人気のあったものである。1891年に世間からは忘れられてこの世を去った時は『白鯨』の作者ではなく『タイピー』の作者であったことはよく知られている。<sup>4</sup>

出版以後今日まで、莫大な批評が書かれているが、時代を分けると、出版時の19世紀半ばと、20世紀の後半が、主として批評が産出された時期である。この二つの批評の山には、かなりの違いがある。19世紀に批評したのは、一般大衆、インテリ層、教会関係者が読む各新聞雑誌の寄稿者で、それぞれの読者を対象とした書評である。当然ながら、わかりやすい、印象的な内容となっている。一方、20世紀のメルヴィル再評価から始まった批評は、19世紀の批評と比べると、対象も、内容の質もさまがわりして、文学研究者が、他の研究者向けに書くという研究論文が主である。19世紀が一般読者の文学市場に向けられていたとすれば、20世紀の批評は研究者の文学市場に向けられているといえよう。

『タイピー』研究に必読の一冊に、Milton Sternが編集した『「タイピー」批評集』*Critical Essays on Herman Melville's Typee* (1982) が挙げられる。なかで、Joseph Menkeが、1846年から1981年までの、英語で書かれた『タイピー』に関する膨大な出版雑誌、研究論文の書誌をまとめたのが、特に貴重である。<sup>5</sup> その書誌に記載された記事、論文は544編、単行本は334冊に及ぶ。ウエンケは年代を追った編集にあたって、1921年をひとつの区切りにしている。メルヴィルの南太平洋の旅の概要、あるいは作品についてのコメントを含んでいる伝記的スケッチとか死亡記事などは、1921年以後も引き続き書誌に記録されているが、単に『タイピー』の伝記的背景に言及しただけのものは1921年までで、それ以後に書かれたものは研究書誌には入っていない。というのも、1921年に初めて、メルヴィルの伝記がRaymond M. Weaverによって、独立した一冊の本『ハーマン・メルヴィル、航海者そして神秘主義者』*Herman Melville, Mariner and Mystic* となったからである。もう一つの区切りは、1945年である。それまでは『タイピー』に関したすべての論考、言及を書誌に入れたが、1945年以後は数が膨大となり、単なる言及では入れなかったとウエンケは述べる。編者スターンの説明によると、膨大な論文が出されるようになった理由としては、戦後のG. I. Billの制定と、次々にできた大学院のためである。そして文学批評はこれ以後悪循環に陥ってきたとスターンは続け、研究者は論文を書く場合、当たらなければならない二次資料があまりに多くなって、その結果、不十分な調査によって、同じような論文が繰り返し量産されていると言う。<sup>6</sup> この時代の文学批評の手法と、編者スターンの批評については、20世紀の項で批

判的に吟味する予定である。

以上が『タイピー』批評の歴史とその資料の大枠であるが、もとより筆者はすべての資料に目を通してはいない。本研究の基礎としたのは、19世紀については、Jay Leydaが編集した*The Melville Log*その他を参照した。<sup>7</sup> 今世紀については、研究者によってその文学市場で参照され、膾炙されているものを、共通の資料と見なし、それらを努めて系統的に読むことにした。ウエンケが収集した膨大な資料と比べると、はるかに乏しいものであるが、今日の批評に至るまでの文学批評の流れを、中心のところで把握する目的には、大きく逸れているとは思っていない。

## 2

さて1846年2月にロンドンで、3月にはアメリカで出版された当時の反響であるが、まず第一にこの本は、大西洋の両側で好意的に受け取られた。アメリカでの人気の原因の一部には、Evert DuyckinkのWiley and Putnamシリーズの全国キャンペーンがあったからとも言われる。<sup>8</sup> 書評のいくつかを紹介するつもりだが、傾向を大きく肯定的なものと、否定的なものに分けることができるが、さらに大半を、三つの趣旨にくくってみる。ひとつは、『タイピー』は現実とは思えないほど楽しい本であるというもの。二番目は、ひとまず現実を描いたものとして、そこに探求していた理想を見いだすというもの。三番目は、『タイピー』は悪意に満ちたひどい本であるという反応である。第一は、膨張主義アメリカの時代主潮においての非白人への一般的通念が示される。後者の二つを別の言い方で表すと、ポリネシアをエデンとみるか、あるいは、未開の荒野とみるかの違いである。さらにこの違いは、プリミティヴィズムをどのように概念するかという、基本的に哲学的、あるいは歴史認識の問題でもある。

肯定的な受容の最初は、内容が事実であるかどうかについて問うことはなく、本は楽しい、娯楽的な読み物であったということである。たとえば3月30日の*The Gazette & Times*の評論は典型ではないだろうか。

This is one of the most delightful and well written narratives that ever came from an American pen ; nor could a fresh, graceful and animated style be more fortunately furnished with a suitable theme to set it off to best advantage.

今までアメリカ人の手による、もっとも素晴らしくまた巧みに書かれたもののひとつである。また新鮮であか抜けした生き生きとした文体が、これ以上ない幸運に恵まれそれに適ったテーマを得たことは、最大の利点となっている。<sup>9</sup>

作中では、西洋文明一般およびアメリカのインディアン政策、植民地政策、海外宣教等について厳しい批判が明確に示されているにもかかわらず、大西洋の両側の一般読者には、ひじょうに楽しい読み物として受け入れられた。7月ロンドンの*Gentleman's Magazine*の評から、その気分が伝わってくる。

The whole narrative is most interesting, most affecting, and most romantic. Ah! thou gentle and too enchanting *Fayaway*, what has become of thee ?

内容ぜんぶが、すこぶる面白く、すこぶる感動的、すこぶるロマンチックである。ああ、優しく、あまりに魅惑的なファヤウェイよ、その後の身の上はどうなったのだろう。<sup>10</sup>

南太平洋の島と美しい娘ファヤウェイ。不思議なことにメルヴィルはこの娘が「青い目」をしていると、特別の弁解もなく描いている。さらに、島逗留のクライマックスの場面では、主人公は酋長から例外的な許しを得て、女性にはタブーであるカヌー乗りにファヤウェイを誘うことになっている。南海におけるメルヴィル研究の恩恵を受けている今日では、それらが現実にはあり得ないこと、さらに舟遊びをしたという島のなかの湖というのは、実際には存在しないことを私たちは知っている。1846年当時、明確な根拠はないが、作品はフィクションではないかと疑う人たちがいたのも当然である。しかしフィクションであることを気にしたのは、イギリスの出版者 John Murray、また彼の“Colonial and Home Library”の読者のような、教養ある階層であって、そうでない読者層は、先ほどのジェントルマンズ・マガジンの書評に見られる受け取りかたであった。

当時の文人たち、例えば、ホーソンやホイットマン、マーガレット・フラータちも非常に好意的な受容を、書評や手紙に記しているが、ここで John L. O'Sullivan が発行した *New York Weekly News* の 1846 年 3 月 21 日付け書評を読んでみる。それによると、本は熱帯に住む人々についてのバラ色の物語で、実在するようには思えない。適当な恐怖もあって、パレーの題材になる、といい、さらに次のように続ける。

Typee, in fact, is a happy hit which ever way you look at it, whether as travels, romance, poetry or humor. It has a sufficiency of all of these to be one of the most agreeable, readable books of the day. Curiosity is piqued, good sense flattered; there is a dash of romantic Rousseauism, with now and then a shadow of Cannibal as a corrective.

タイピーは、どんな角度から読んでも大ヒット作である。読者はこれを旅行記として読むかもしれないし、またロマンス、詩、ユーモアとして読むこともできる。それら全部に充分に当てはまり、今日のもっとも愉快で読みやすい本の一冊である。好奇心を刺激し、良識にもかなっている。ロマンチックなルソー主義の高揚があり、所々にカンニバルの黒い陰がそれを中和している。<sup>11</sup>

オサリバンといえば、彼がを發刊した、*United States Magazine and Democratic Review* は 1837 年から 1850 年代まで、アメリカの文学と政治のナショナリズムの指導的代弁者であった。<sup>12</sup> オサリバンが歴史にその名を残す重要な事実、かれが 1845 年に、『デモクラティック・レビュー』*Democratic Review* 紙に寄稿した文章で、アメリカはアメリカの自由の制度を大陸全土に広げるといふ「明白なる運命」manifest destiny を持っているのだと、はじめてこの言葉を使ったことによる。アメリカの 1840 年代は、文字どおりの膨張主義の時代である。1845 年はテキサス併合。1846 年はオレゴン割譲。1848 年カリフォルニアおよびニューメキシコ獲得。膨張主義はもちろんそれ以前からあったし、「明白なる運命」の意味するところは新しいものではなかったが、「この言葉の組み合わせそのものは斬新で、雰囲気には当てはまったので、言語の一部になった」のである。<sup>13</sup> 12 月 27 日『ニューヨーク・モーニング・ニュース』紙の社説で、オサリバンは次のように述べている。「(オレゴン獲得の) 要求は大陸全体に拡大し、所有するわれわれの明白な運命によるものであり、この大陸は神が自由と連邦制度による自治の偉大な実験のために、われわれにあたえられたものである」<sup>14</sup> すなわち 1840 年代の人々は、アメリカは太平洋までの大陸を、神によってあたえられた自然の境界線と信じたのである。

『タイピー』には改訂版では削除されたが、当時のハワイにおける列強の植民地政策について

の附記があった。そのなかでメルヴィルは、顕著にイギリスびいきの意見を述べている。アメリカの拡張論者は英国嫌いであったが、オサリバンの雑誌の書評子は、その意見について全く意識に残っていない印象さえ受ける。

ナショナリストという点、ハーマンの兄、Gansevoortがそうであった。ガンズヴォルトは第11代大統領Polk(1845-49)を応援して選挙運動に励み、テキサス併合を支持した。マニフェスト・デスティニーを堅く信じる兄とメルヴィルは、意見の一致を見ることはなかったと思われるが、この本の出版が可能になったのは、ひとえにこの兄の努力によっている。ポークが大統領に当選することで、ガンズヴォルトはロンドンのアメリカ公使の書記官となって渡英することになり、彼の手によって『タイピー』の原稿がマレイのもとに届けられたからだ。兄は弟の代理人として原稿を読み、またマレイと打ち合わせを繰り返しているのであるから、弟の原稿に書かれているのは自分とは異なる政治的立場であるのは知っていた。それでかれが何を感じたのか不明だが、少なくとも、ロンドンで倒れる直前まで、弟のために奔走したことは確かである。しかし、本の成功は兄にはむしろ不利であった。ガンズヴォルトの上司は、メルヴィルの植民地攻撃については同意できなかったし、その上、ガンズヴォルトについて書記官の職務には不適任と考えていたのである。<sup>15</sup>

以上のような背景を考慮すると、作品に込められた政治的イデオロギーには、意外と読者からの反応は目立たず、それよりも、まずは読者を魅了する楽しい楽園の物語りとして受容される時代的主潮が自ずと見えてくる。本国におけるインディアンとどうように、南太平洋の島々に住む人々の生存に関する危機的な状況は、アメリカ文明の地理的および宗教的膨張主義の影で、ほとんど問題にもされなかったことがわかる。膨張主義は大陸全体にアメリカ式民主主義を広げることが意味したが、民主主義の担い手はヨーロッパ系白人を意味して、異教徒である先住民については含まれていなかったからである。

付け加えておくと、ニューヨーク・ウイークリー・ニューズの書評が、20世紀に本格的に研究されることになるテーマに触れているのは、注目に値する。一つは作品の虚構性の問題。19世紀では内容は本当の話であることが出版の条件であったから、「実在の人物というより、華やかなバレエの登場人物のような」という反応は、後で触れるが、出版者にとっては深刻な問題であった。前述したように、とくにイギリスでは書かれ内容の「信憑性」について後々まで疑惑が払しょくされず、メルヴィルを悩ませることになる。もう一点は、虚構性とも関連するが、書評が作品の特徴として述べた「ロマンチックなルソー主義の高揚があり、所々にカンニバルの黒い陰がそれを中和している」というところ。書評のこの指摘は、そのまま今世紀にはいつて行われたメルヴィル研究の先駆けのひとりである、チャールズ・アンダーソンの大著『南海のメルヴィル』の結論となっている。

数多くの旅行記が読まれた時代であったが、メルヴィルが他と違うところがあるとすれば、またそれがメルヴィルが人気を得た理由にもなるが、それは、かれが観測したことを書いたのではなく、経験したことを書いたことである。さらに付け加えるならば、経験したことに対する感情的な反応を書いた。<sup>16</sup> この点について、同じくポリネシアに出かけた記録を残し、それをメルヴィルが本文で参考にしたと言及している、C. S. Stewartの『南海訪問』*A Visit to The South Seas* (1831)の文章をみておこう。「三章 ヌクヒヴァ到着」という見出しの下に、「合衆国船ヴィンセネスVincennes号、1829年7月27日、タイオハエ湾」と記されている。

We are once more at anchor. Yesterday at twelve o'clock, just after worship, Huahuka,

the most eastern island of the Washington group was descried on our lee bow, thirty miles distant. We at once bore down for it, and weathering the southeast point, coasted for a distance of fifteen miles closely along its southern shore. On this side, it seemed lofty, precipitous, and barren—too much so we judged to be inhabited: its greatest height was estimated at fifteen hundred or two thousand feet.<sup>17</sup>

再度われわれは錨をおろす。昨日12時、礼拝の直後、ワシントン諸島の最も東の島、ハウフカを、船首風下30マイル先に認めた。ただちに風上から近づき、南東の方角風上に航行、島に近接し海岸沿いに15マイルの距離を進んだ。島のこちら側はそびえ立つ断崖絶壁で不毛とみえた。これでは人は住んでいないと判断。高さは最大で千五百ないし二千フィートと見積もった。

再度、錨を下ろしたとあるのは、リオデジャネイロ、リマを経てワシントン諸島に至ったからであろう。記録は、数字と方角をしめす言葉が、確かなステップとなって、文章はその上を歩いている。観察者の個人的な視点や、感情を示す形容詞は、まったく無い。ただひとつ「そびえ立つ」という形容詞が、平坦な文章のなかでは目を引き期待感を持たせる単語であるが、すぐに続く「断崖絶壁で不毛」でうち消される。これこそ教養人が求める事実の記録であった。書き手の経験を語り、そこから得る心の動きは描かれていない。正確な客観的描写が重要なのである。

一方、メルヴィルが乗った船もやはり似たルートをたどって同じくワシントン諸島に至るのであるが、島影が見えた時のようすは、次のように描かれた。

...Soon, other evidences of our vicinity to the land were apparent, and it was not long before the glad announcement of its being in sight was heard from aloft, — given with that peculiar prolongation of sound that a sailor loves—‘Land ho!’

The captain, darting on deck from the cabin, bawled lustily for his spy-glass; the mate in still louder accents hailed the masthead with a tremendous ‘where-away?’ The black cook thrust his woolly head from the galley, and Boatswain, the dog, leaped up between the knight-heads, and barked most furiously. Land ho! Aye, there it was. A hardly perceptible blue irregular outline, indicating the bold contour of the lofty heights of Nukuheva.<sup>18</sup>

すぐに、僕たちが島に接近したことのほかの証拠も明らかになり、まもなく、島が見えたという喜ばしい知らせが、マストヘッドから聞こえた—船乗りが愛するあの独特の、長く引いた叫び声で—「おい島が見えるぞー！」

船長は、船室から飛び出してくると、望遠鏡をよこせとかなり立てた。運転士はさらに大きな抑揚をつけてマストヘッドに向かってものすごい声で「どっちの方角だあ？」黒人のコックは調理室からあのもしゃもしゃの頭を突き出し、水夫長であるあの犬は、船首副肋材の間から飛び出して、世にもどう猛な声で吠え立てた。おい島が見えるぞー！アイ、確かに見えたとも。それとは定かでない青色の不ぞろいの稜線。これがヌクヒヴァのそびえ立つ、くっきりした山頂を指し示すものなのだ。

目に見えるもの、耳に聞こえるものと、船員、船長、犬の動作行為が渾然一体となり、船ぜんたいが、文章ぜんたいとなり、島影を見ようと躍起になっているさまを映し出している。長い航海の果てに見える島影へのあこがれと喜びが内容であり、島を描くことが目的的文章ではない。



先のスチュアートの文章を、メルヴィルは自分が書く前に読んだとすると、スチュアートの対極になるような文章を、あえて紡いだのだと言わんばかりである。lofty「そびえ立つ」は、メルヴィルも使った単語である。しかし山は、まだ見分けられないふぞろいの青い稜線でしかないが、力強いくっきりとした輪郭を予測させ、登場人物とともに読む者にも、新たな期待を呼び起こす文体である。それは作品展開の期待でもある。スチュアートの文章が読者の知的好奇心に訴える文章であるなら、メルヴィルのそれは、書き手の体験とそこから引き出されるさまざまな感情に、読者が一体化する書き方となっている。

人気の原因のひとつはこれで、生き生きとした文章を人々は迎えたのである。楽しさを強調する書評子には、作品が実際の経験であることにこだわらない部分、現実感からほど遠く、類型的な南島の野蛮人像をのみ読みとって、満足したのである。ヨーロッパやアメリカ諸国の南太平洋の覇権は、アメリカ国内の膨張主義や拡張政策と同じく、「明白な運命」であったのだ。

### 3

読書を楽しんだだけではなく、そこから教訓を得ようとした人たちもいた。超絶主義者そしてフーリエ主義者John Sullivan Dwightもそのひとりである。4月4日付けのBrook Farm *Harbinger* でドワイトは、メルヴィルが「自分の想像で、事実を潤色しているのではないかというかすかな疑いを拭いきれない」(we cannot escape a slight suspicion that he has embellished the facts from his own imagination)と言いながらも、本がChief Justice Shawに献じられていることなどから、「内容の事実は疑いの余地はないものとして考えよう」(we shall consider it as though its facts were not susceptible of doubts)と前提しておいた上で、タイピー社会がどれほど理想的であるかを読者に知らせるため、本文をかなり長く引用してみせた。そしてタイピー社会にはなぜ、キリスト教社会には無い美徳や調和があるのだろうかと問いかけ、つぎのように結論する。

これらは意味深い疑問であるが、答えは簡単である。全体を理解するための重要な鍵は、タイピーには、**すべての者に豊かさがある**、ということである。そしてわれわれの開化した知的な文明の利己主義や犯罪を生む、もっとも栄養ある温床が、そこには存在しないからである。ここにこそ、今19世紀の指導者たちが、タイピーから学ぶことができる教えがあるのだ。<sup>19</sup>

ドワイトの根底にあるのは、歴史哲学としてのプリミティヴィズムである。その内容は、人と社会の状態は初期の段階が最良であった、というもので、この考えは西洋社会にもっとも長い間とどまった概念である。<sup>20</sup> それとは別に、特に18世紀に最高潮に達するプリミティヴィズムについて、A. O. Lovejoyは、それを文化的プリミティヴィズムと言い、先ほどの年代的プリミティヴィズムと区別している。18世紀の文化的プリミティヴィズムについて、ラヴジョイは、そのよって来るところはさまざまだが、共通しているのは「世の中の調子は狂っている」(“The time is out of joint.”)<sup>21</sup>という確信ではないかと説明する。「文明人の生活の異常な錯綜とか複雑さ、病的なまでの多様性、欲望の競い合い、圧倒的に過剰な所有物、わざとらしさ、自発的感情の発露の欠如」などがそれで、人工的な物や人の業が、自然すなわち人の本来のものを腐敗させてしまったと人々は感じる。それならば正常な個人生活と正常な社会秩序のモデルはどこにあるかと探し求め、それに近いものが、「野蛮な」人々に見いだされるというのである。

自然の素朴な生活がすぐれていることが文学に豊かに現れ、ルソーは確信的な言葉で感動的に披瀝した。ルソーの『人間不平等起原因論』*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*が述べてところは、人間はもとの自然状態にあつては孤立分散し、自己保存とあわれみの本能を持ち、それにしたがって独立した自立自足の生活をしていて、やがて人間は共同生活をはじめようになり、しばらくは幸福な状態だったが、私有財産が始まると不平等が生じた。国家とはその不平等、富の不均衡を合法化したものである。文明人が不幸なのは、人間が本来悪なのではなく、複雑な巨大な社会環境が人と人との反発や不満、支配や搾取を生み出しているというものである。

18世紀後半からヨーロッパは南太平洋へ冒険的航海へ出かけるが、ポリネシアは、西方へと源と理想を追求する旅の行き着く先で、そこに魅惑的な、自分たちのプリミティヴィズムに役立つモデルを求めた。プリミティヴとは、文明社会の資本主義の悪に相対する、人と人との思いやり、共同社会への愛、平等といった概念を意味した。

作品『タイピー』が読者に喚起したのは、まぎれもなくこのルソー的世界である。「人は本来道徳律を持ち、文明にさまたげられなければ本来の善を体現する」をこの本の中に見つけたのである。社会主義者、平等主義者のドワイトが見つけたのは、人が自然の良き秩序から墮落して、経済的不平等の社会になったことの、原因と証明であり、さらに、これから将来に向かっての、努力目標である。

人類の初期において人は優れていたというこの概念は、単にノスタルジアだけではなく、先祖帰り(reversion)によって改革できる可能性を与える。かつて良きものが存在したのなら、再び取り戻すことができる。過去に存在した理想は未来の到達点になる。いわば人は後ろ向きに前進する。読者は『タイピー』を読むことで、長年抱いてきた「高貴な野蛮人」への憧れを、生き生きとした文章表現のなかに確認できたと感じた。作品は人の心にある「神話」の力を引き出したとも言える。

#### 4

読み物としての楽しさとは別に、問題点がふたつあった。ひとつは、先ほど述べた作品の内容の「信憑性」、もう一つはメルヴィルのプロテスタントの宣教活動へ批判についてのである。19世紀と20世紀の批評の違いを考える上でも、この二つの問題は興味深い。『タイピー』はロンドンの出版者ジョン・マレイの「植民地および国内図書」“Colonial and Home Library”シリーズの一冊に加えられたが、このシリーズは実話を集めたもので、フィクションは堅く禁じられていた。ところがマレイは原稿を一読して、「フィクションの汚れ」“the taint of fiction”<sup>22</sup>を感じとり、さらに作品は初心者書いたものではなく、経験を積んだ作家の手になるものではないかとも疑った。そこで弟ハーマンの代理人として、ロンドンでマレイとの交渉に当たった兄のガンズヴォルトは、「冒険家と冒険作家は同一人物である」“adventurer, and the writer of the adventure are one & the same person”ことを保証しなければならなかった。<sup>23</sup> そもそも『タイピー』は『ロビンソン・クルソー』に比較しうるものだが、実話であるはずはない、という理由でHapers社が断ったものだった。ガンズヴォルトの手紙で、マレイは出版の条件として、もっと本当らしさを付与するためにいくつかの章(20, 21, 27)を加筆させたことがうかがわれる。それでもマレイは「フィクションの汚れ」の疑いを払拭できず、その後も長くメルヴィルを困惑させることになる。メルヴィル自身はこれについて、序文できっぱりと、“truth”であると明言してい



る。しかしながら、アメリカではこの問題は、イギリスと比べてさほど大きく発展しなかった。この問題は結局今世紀まで持ち越され、1930年代になってメルヴィルの実際に辿ったルートを確認する研究がされることになる。

もう一つ、出版時から評者の間ではプロテスタントの宣教活動が議論となった。例えばMargaret Fullerはメルヴィル弁護の意見を表明し、「観察や描写の多くはまったく正確であるとわれわれは信じる」と言明して、つぎのように書いた。

...Is the account given of the result of the missionary enterprises in the Sandwich Islands of this number? We suppose so from what we have heard in other ways.

ではサンドイッチ諸島における宣教事業計画の結果の報告も同様であろうか。われわれが別の方面で聞き及んだところから判断して、その通りであると信じる。<sup>24</sup>

このようなメルヴィル支持もあったものの、教会側からの反発はかなりあったようで、例えば4月14日付けGeorge Duyckinckの手紙は、「タイピーがお気に召したことは嬉しいのですが、全部が真実だというあなたの考えにはご同意できません。こちらの宗教関係新聞は、宣教師の扱いやその他の点が理由で、本に対して非難ごうごうです」<sup>25</sup> (I am glad you like Typee though I cannot join with you in taking it all for sober verity. The religious papers here haul it over the coals for its treatment of the missionaries and some other points) と書いている。また、「アメリカ海外宣教理事会」(American Board of Commissioners of Foreign Missions)の事務局長Rufus Andersonは7月31日付けのWiley and Putnam 社あての注文書に「メルヴィルの『タイピー』を読みましたが、貴社の御名と認可が付されしことをしごく残念に存じます」と、出版したことに抗議する意味を追記している。<sup>26</sup>

同じく7月には*The Christian Parlor Magazine*が10ページにわたって「タイピー：宣教活動の中傷文書」“Typee: The Traducers of Missions”と題して、メルヴィルを攻撃する評論を掲載した。<sup>27</sup> これは海外での伝道活動を支持、弁護し、作者のメルヴィルがいかに事実に対し無知であることを証明し、彼の「文明とそして特に宣教活動に対する目にあまる侮辱」に反論するのがその内容で、この評論は『タイピー』が悪意に満ちた本であるという宣伝となった。

じつは出版元のワイリーはアメリカ版の第一版を出すときから「不適切」な個所を大幅に削除する作業を始めていた。改訂版は8月の始めに出るのであるが、Leon Howardによると、6月20日から26日の間にメルヴィルがニューヨークで出版者と話し合いをして、7月11日までには改訂を済ませたらしい。ということは、ワイリーは世間の批評を見て改訂版の準備をしたのではなく、むしろ彼が懸念したとおりの激しい批評が誌上に現れたのである。<sup>28</sup>

削除にメルヴィルはほとんど抵抗した様子はなく、マレー宛ての手紙にも、削除の弁明は、自分の納得ずみであるとの旨を書いている。しかしながら、1846年7月28日付けのダイキンク宛の手紙には一言、「削除版?—嫌な言葉だ!」“Expurgated?—Odious word!”とあるので、一方で読者の声に応じるプロの書き手の意識を持ったとも言えるし、また同時に自分のイデオロギーの主張を削除せざるを得ない戸惑いの両方を味わったと推測される。<sup>29</sup>

本当にしてはおもしろ過ぎる言われた『タイピー』の内容をそのまま信じたのは、宣教推進者だけだった」とルイス・マンフォードは1929年に出したHerman Melvilleで述べているが、宣教活動の側の反応は、他と比較すると、ひじょうに深刻で、イデオロギーの上でもっとも明確である。<sup>30</sup> プリミティヴは打破すべき悪徳の代表であったからだ。『タイピー』—伝導活動の中

「傷文書」を書いたのは、メルヴィルと同じ年齢のWilliam Oland Bourneで、教育者そしてリフォームドチャーチの会員である。プリミティヴィズムと根本的に異なるのは、一方にとっては善良な島の人々に対して文明こそが墮落であるが、カルヴィン主義者にとっての文明とは、墮落した野蛮に対するキリスト教社会を意味する。宣教師にとってはエデンとは地理的なものではなく、新世界をキリスト教化することで得られるものである。文明化とはそのための条件であった。南太平洋の島は、エデンとはほど遠く、悪の極みとしてカニバリズムの風習を指摘し、いかにそこが墮落したサタンの領域であるかを述べる。

19世紀は厳格なカルヴィニズムから、人の完全性を認める方向へ、さらに人と神との類似性を主張する方向へと変動する時代である。文明人がもっとも神に類似していたとすると、南海の野蛮人はボーンに言わせると、「かろうじて人間であったが、無知蒙昧、善悪の区別のつかぬ者たちであり、乱暴な性格、救いがたい社会状況」のなかの彼らは「滅ぶべき獣」と殆ど同じであると見た。だからこそ宣教をとおして教育と魂の救済が必要となる。したがって、『タイピー』が文明社会の状況と比べて、南海の島の方が優れていると賛美することじたいが非難の対象となる。

島民が達成すべき文明の象徴としてボーンが挙げているのは、宣教師たちが住む「絵のように美しく上品な家具のついた珊瑚礁岩でできた邸宅」である。メルヴィルはこういった邸宅を文明国の経済的搾取とした。しかしボーンにとっては島に建つ西洋風の邸宅は、低い野蛮に対する高い西洋文明の精神の象徴である。すなわち、文明化とは、風土の違いにかかわらず、島の文化を取り壊して除き、西洋文化そのものを現出させること。それが島民の精神を高め、清らかな魂を得るための条件なのである。

結局、ボーンが批判し指摘した個所はすべて第二版から削除され、それがアメリカ版の底本になったのだから、文明civilizationとは単なる言葉ではなく、活火山のように活動し、社会を突き動かしていたということがわかる。文芸批評も無関係ではありえない。新聞雑誌のメディアを通じて、直接に読者にわかりやすく、率直に語り、また訴えることでその証となっていた。第二版以後は教会関係の非難は静まっている。<sup>31</sup>

## む す び

結論としてまとめてみると、『タイピー』は19世紀では基本的にノンフィクションの旅行記であったから、評論に現れる言説はそのまま実際に活動するアメリカ文明の意識の投影であった。

作品にはフィクションがあることを見抜いた出版者や批評子はいたが、それを正確に跡づける研究は20世紀に入ってからである。また最初から作品全体を独立した虚構世界としてあつかう批評も20世紀に入ってからである。しかしどちらにしても、主人公トンモの提示の仕方に、タイピーを描くそのあり方に作者が存在することには変わりがない。幅広い読者層を惹きつける書き方で成功したが、メルヴィルは19世紀半ばの南太平洋の植民地覇権の争いを目撃し、そういった時代の事件を真正面から見据えて、この作品を書いたのであるからには、そこにおのずと、作者の世界観、人間観、歴史観が表れるのを読みとることがひつようであるのは当然である。

マニフェスト・デスティニーで表される膨張主義アメリカの下の読者には、異国の楽しい冒険物語であって、同じ時代に生きる人々の歴史的、文化的、経済的現在の実状と危機意識といったメルヴィルのメッセージはほとんど届いていない。メルヴィルが批判した宣教活動は、アメリカ国内の宗教活動と連動し、『タイピー』という作品の改訂版を出す原動力となる。マルケサス人はプリミティヴとして、ルソー的「無垢なる野蛮人」あるいは、「墮落したサタンの存在」と正

反対の受容が評論にあらわれるが、それらは共に西洋の伝統文化が生み出した観念的産物である。どちらにしても実際のタイピー人ではなく、見る者の織りなした虚構である。

『タイピー』批評を、現実の太平洋の島民と、宣教師や船員たちに表される西洋社会の人々との出会いを焦点として読む場合には、見落としてはならない重大な問題がある。それは、島民の側の視点の存在が無いという、一見当たり前のようでありながら、そのじつ言及されることのなかったところのものである。マルケサスを野蛮として見つめ、自らを文明人と意識する西洋人を、いったい当のマルケサス人はどのように考えたのだろうかという問いかけは、19世紀の批評子には、皆無である。また欠けていることを認識する視点もないことである。当時の旅行記がそうであったように、観測する視点と観測される対象者が存在するだけである。批評子が興味をもったのは、観測する側である自らを、文明に属する者と規定して、観測される対象者を野蛮と決めたうえで、メルヴィルがどのように野蛮を観測したか、それを検証することであった。その事に異議を唱える者があるはずもなく、異議があったとすれば、それはメルヴィルが教会も含め、ビクトリア朝の価値観からはずれていると見なされた時である。最終的に文明社会の価値観を否定する言語があるかどうか、ビクトリア朝の品性を損なう言語があるかどうかであって、観測される側の真意を問いかけるたぐいの視点は皆無である。この点が意識されるのは、130年以上あとの、20世紀後半である。

1846年に処女作が出てからしばらくはメルヴィルは騒がれたが、50年代では評判は下がり、60年代では文学の世界で彼の名前は聞かれなくなる。70年メルヴィルの名はほぼ消えてしまった。

## 注

- 1) Herman Melville, *Moby-Dick*, 99章
- 2) T. Walter Herbert, Jr., *Marquesan Encounters : Melville and the Meaning of Civilization* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1981), p. 20. ハーバードはCharles Stewart, David Porter, Melvilleの3人を取り上げ、三様の体験と文明観を論じた。
- 3) *Ibid.*, p. 22.
- 4) Jay Leyda, *The Melville Log : A Documentary Life of Herman Melville, 1819-1891, 2vols.* (New York : Harcourt, Brace, 1951) ; rpt. 'With a New Supplementary Chapter,' 2 vols. (New York : Gordian Press, 1969), p. 837には次のようにある。September 29, 1891 An obituary notice in the *New-York Daily Tribune* : He won considerable fame as an author by the publication of a book in 1847 entitled "Typee" ... This was his best work, although he has since written a number of other stories, which were published more for private than public circulation.
- 5) Joseph Menke, "An Annotated Bibliography of *Typee* Studies" Milton Stern, ed. *Critical Essays on Herman Melville's Typee* (Boston, Mass. : G. K. Hall & Co., 1982), pp. 259-314.
- 6) Stern, ed. *Critical Essays*, p. 2.
- 7) 19世紀出版時の反響を知るため、この時代の記録・文書資料のリプリントとして以下を使用した。Jay Leyda, *The Melville Log* ; Charles Roberts Anderson, *Melville in the South Seas*. New York : Columbia University Press, 1939. Reprinted, New York : Dover, 1966 ; Watson G. Branch, ed. *Melville : The Critical Heritage*. London and Boston : Routledge & Kegan Paul, 1974 ; Milton Stern, ed. *Critical Essays on Herman Melville's Typee*. Boston, Mass. : G. K. Hall & Co., 1982.
- 8) Laurie Robertson-Lorant, *Melville : A Biography* (Amherst : University of Massachusetts Press, 1996), p. 144.
- 9) *Log*, 208.
- 10) *Log*, 225.
- 11) *Log*, 914, 204. Typee is reviewed and extracted in John L. O'Sullivan's *New York Weekly News* : For the most part the book is a rose colored account of a tropical race which seems pictured to us cold northerners, like the performers in some rich ballet rather than as actual inhabitants of this labor stricken earth. If the subject for a new ballet is wanted at the Bowery Theatre we recommend them to take Typee. An occasional combat between Hap-

par and Typee might scatter the band of Marquesan dancers, lightly clad, who would figure on the occasion and impart that pleasing horror of melodrama without which the enjoyment of a mere picture of happiness is entirely ineffective. It is a capital subject for the stage.

- 12) Michael Paul Rogin, *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville* (Berkeley: University of California or New York: Alfred A. Knopf, 1983), p. 72.
- 13) Frederick Merk, *Manifest Destiny and Mission in American History* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1963), p. 24.
- 14) 山岸義夫『アメリカ膨張主義の展開』(東京: 勁草書房, 1995), p. 34.
- 15) Laurie Robertson-Lorant, *Melville*, p. 14.
- 16) 当時の旅行記における文体と文学市場については, Sheila Post-Lauria, *Correspondent Colorings: Melville in the Marketplace* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1996) がもっとも詳しい。
- 17) Charles. S. Stewart, *A Visit to The South Seas*, 2 vols. (New York: John P. Haven, 1831), p. 217.
- 18) Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life* (Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and the Newberry Library, 1968), pp. 10-11.
- 19) John Sullivan Dwight, unsigned review, Brook Farm *Harbinger*, 2 (April 4, 1846; rpt., Stern, ed. *Critical Essays*), pp. 22-27で次のように述べている。

How is it that without our learning or our religion these cannibals can thus put to shame the most refined and Christian societies? How is it that on a mere state of nature they can live together in a degree of social harmony and freedom from vice, which all our jails, and scaffolds, and courts of justice, and police officers, and soldiers, and schoolmasters, and great philosophers, and immense politicians, and moral codes, and steam engines, material and spiritual, cannot procure for us? These are questions of some significance, but yet not difficult to answer. The great secret of the whole matter is that in Typee there is *abundance for every person*, and thus the most fruitful cause of the selfishness and crime of our enlightened and philosophic civilization does not exist there. Here is the lesson which the leaders of this nineteenth century may learn from the Typees ...

- 20) A. O. Lovejoy, "Foreword" to Louis Whitney's *Primitivism and the Idea of Progress* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1934), xi.
- 21) "The time is out of joint," Shakespea, Hamlet, I, v, 189.
- 22) *Log*, p. 200.
- 23) *Log*, p. 96.
- 24) Margaret Fuller, unsigned review, *New York Tribune*, 4 April 1846 rpt. Branch, ed. *Melville*, pp. 77-8.
- 25) *Log*, p. 211.
- 26) *Log*, p. 224.
- 27) William Oland Bourne, "Typee: the Traducers of Missions," *Christian Parlor Magazine*, 3 (July, 1846; rpt., Stern, ed. *Critical Essays*), pp. 38-54. 書き出しは以下のように激しい口調である。  
An apotheosis of barbarism! A panegyric on cannibal delights! An apostrophe to the spirit of savage felicity! Such are the exclamations instinctively springing from our lips as we close a book entitled *Typee: a Residence in the Marquesas*, lately published in Wiley & Putnam's interesting 'Library of American Books.'
- 28) Leon Howard, "Historical Note," Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*. (Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and the Newberry Library, 1968), pp. 277-302.
- 29) *Log*, p. 224.
- 30) Lewis Mumford, *Herman Melville: A Study of His Life and Vision* (New York: Harcourt, Brace & World, 1929), p. 73.
- 31) *Log*, p. 265. 1847年11月カトリックの雑誌 *United States Catholic Magazine and Monthly Review* には次のように書かれた。"Typee is a sprightly, well written, entertaining book ... There is one fatal objection to it, — its voluptuousness, if we may use the word... The author is a Protestant."